

平成27年度宮古群島病害虫発生予報第7号(10月予報)

I 10月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

| | 気 温 | 降 水 量 | 日照時間 |
|---------|-----|-------|------|
| 高い(多い) | 30 | 30 | 20 |
| 平 年 並 | 40 | 40 | 40 |
| 低い(少ない) | 30 | 30 | 40 |

(平成27年9月24日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

| | 平均気温(°C) | 最高気温(°C) | 最低気温(°C) | 降水量(mm) | 日照時間(h) |
|-----------|----------|----------|----------|---------|---------|
| 宮古群島(宮古島) | 28.7 | 31.6 | 26.6 | 130.8 | 246.7 |

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 10月の発生予報および防除上の注意事項

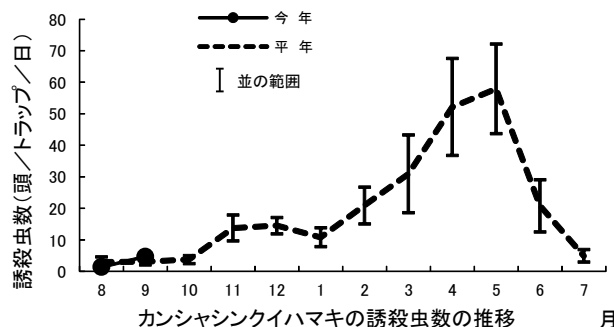
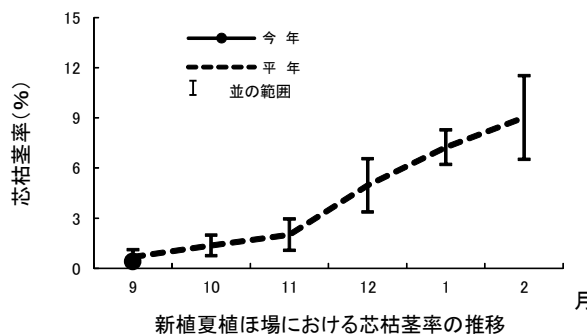
1 さとうきび

(1) カンシャシンクイハマキ

発生程度 : 並

予報の根拠

- a 9月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は0.4%(前年0.1%、平年0.7%)と平年並であった。
- b 9月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は4.7頭(前年0.6頭、平年3.1頭)と平年よりもやや多かった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に葉液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成27年度病害虫発生予察注意報第1号(平成27年4月30日付)参照。

○ イネヨトウの防除対策

- a 9月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は0.4%(前年0.1%、平年0.7%)と平年並であった。
- b 9月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.1頭(前年1.0頭、例年2.0頭)と例年よりやや少なかった。

- c カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- d 平成27年度病害虫発生予察注意報第1号(平成27年4月30日付)参照。

○ バッタ・イナゴ類の防除対策

- a 9月上旬の調査の結果、一部地域でタイワツチイナゴによる食害が観察された。
- b 発生源となるほ場及び周辺の除草を徹底する。
- c 平成27年度病害虫発生予察技術情報第1号(平成27年6月1日付)参照。

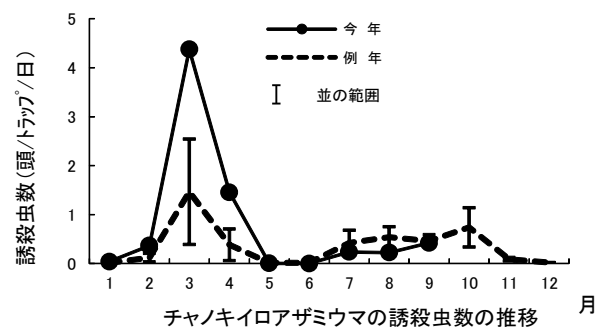
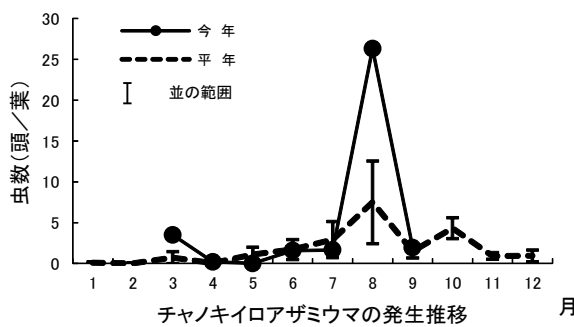
2 マンゴー

(1) チャノキイロアザミウマ

発生程度 : 並

予報の根拠

- a 9月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は2.0頭(前年0.3頭、平年1.5頭)と平年並であった。
- b 黄色粘着トラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.4頭(前年0.2頭、例年0.5頭)と例年並であった。



< 防除上注意すべき事項 >

- a 不用な新葉は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
- b 新梢をよく観察し、初期防除に努める。
- c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- e 平成27年度病害虫発生予報第5号(平成27年7月27日付)コラム参照。

○ ハダニ類の防除対策

- a 9月中旬の調査の結果、ハダニ類の葉あたり成虫数は0.2頭(前年0頭、平年0.4頭)と平年並であったが、一部施設に限られた。
- b 夏から秋に発生が多くなるため、発生が見られる場合は薬剤による防除を行う。
- c 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。